『孫基禎が駆けてきた道』について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学史資料センター 公開日: 2020-11-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山下, 達也 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21222

【資料紹介】

『孫基禎が駆けてきた道』について

山下達也

はじめに

孫基禎（一九一二―二〇〇二）は一九三六年、ベルリンオリンピックに日本代表選手として参加し、マラソンで金メダルを獲得した人物である。孫基禎が日本代表の選手として出場したのは当時、朝鮮半島が日本の統治下にあったがゆえである。孫の金メダル獲得を報じた東亜日報が表彰台上の孫の胸にあった日章旗を塗りつぶした写真を掲載し、記者らが警察に逮捕され、東亜日報には発刊停止処分が下されたことも「日章旗抹消事件」として知られている。

ベルリンオリンピックで金メダルを獲得した孫基禎は、翌一九三七年に日本に留学することになるが、その時に留学先の学校として選んだのが明治大学であった。留学を終えて帰国し、解放後は指導者、韓国の陸上競技連盟の副会

長、ソウル特別市陸上競技連盟理事長、ソウルオリンピック大会組織委員会委員などを歴任し、二〇〇二年十一月十五日、九〇歳で逝去した。二〇一一年には大韓体育会によって「大韓民国スポーツの英雄」に選ばれており、現在では毎年韓国で「孫基禎平和マラソン」（二〇一九年は三・一独立運動および大韓民国臨時政府樹立百周年記念事業としても位置付けられ、同年十一月十七日に開催された）が開催されている。

本稿ではこうした孫基禎の生涯を多数の写真資料とともに記した『孫基禎が駆けてきた道』（原著名は『손기정이달려온길』）について紹介する。同書は韓国で二〇〇四年に出版されたものであり、同書中の文はカンヒョングが記述、写真を中心とする資料の提供はカンヒョングとイジュンスンによるものである。

なお、同書は二〇一九年八月に明治大学史資料センターアジア留学生研究会のメンバーが行った韓国調査の際に訪問した孫基禎記念館（ソウル市）にて同記念館のパンフレットとともに入手した。

構成

本書の校正は次のとおりである。

一．優勝の日

1．八月九日、その日の四二．一九五㎞実況中継

2．悲しい喜び、そして授賞式

3．日章旗抹消事件

二．孫基禎の人生

1．孫基禎の選手生活

2．孫基禎の民族的愛国観

三．第十一回ベルリンオリンピック

1．ベルリンオリンピックの意義

附録

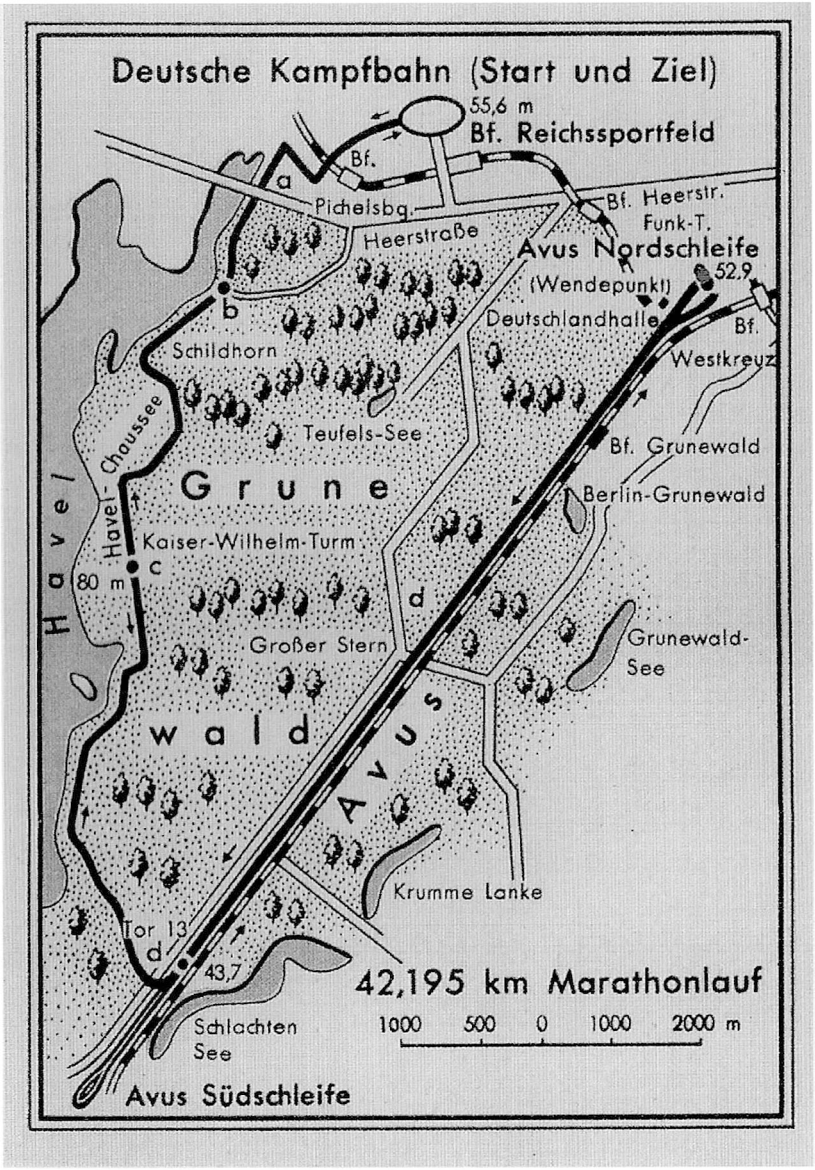
各章の概要

一．優勝の日

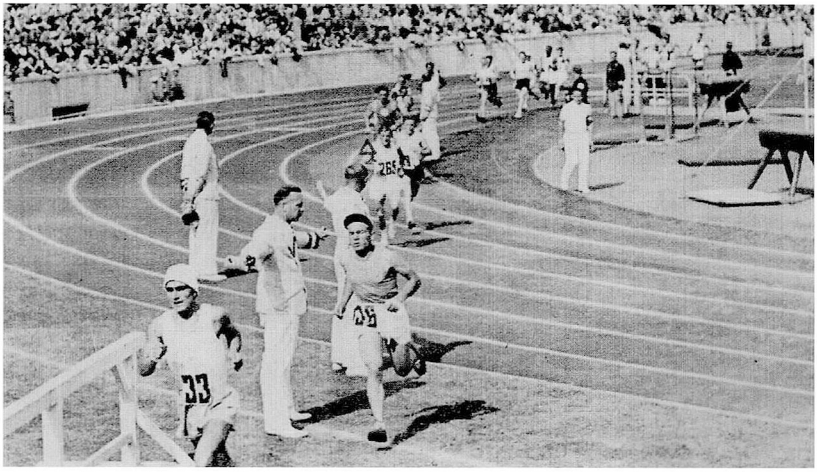
1．八月九日、その日の四二．一九五キロ実況中継

ここでは一九三六年八月九日、孫基禎がベルリンオリンピックで金メダルを獲得したレースについての詳細な解説がなされている。

まずは四二．一九五キロのコースについて、各ポイントでの上り下りの状況や望ましいペース配分等について当時のコース図とともに説明され、その後、スタートからゴールまでの孫基禎の走りが「実況中継」というかたちで紹介されている。



【資料１】ベルリンオリンピックマラソン競技のコース図（『孫基禎が駆けてきた道』、５頁）



【資料２】スタート後スタジアムを出る選手たち（『孫基禎が駆けてきた道』、６頁）

競技当日の午後三時、焼けるような太陽のもとに（気温三〇度）スタートしたのは五十六人の選手。スタート後、メインスタジアムの外に出た時点で孫基禎は二二位であった。

孫基禎は六キロ地点で五位に順位を上げ、その後、上位の選手との争いを繰り広げる。折り返し地点をハーパー選手とともに二位三位で通過した孫は二九キロ地点でアルゼンチンのジャバラ選手をハーパー選手とともに抜き、三一キロ地点で並走していたハーパーを引き離して首位に立つ。

【資料３】折り返し地点をほぼ同時に通過する孫基禎とハーパー
（『孫基禎が駆けてきた道』、９頁）

【資料４】表彰式での孫基禎（右）と南昇龍（左）（『孫基禎が駆けてきた道』、29頁）

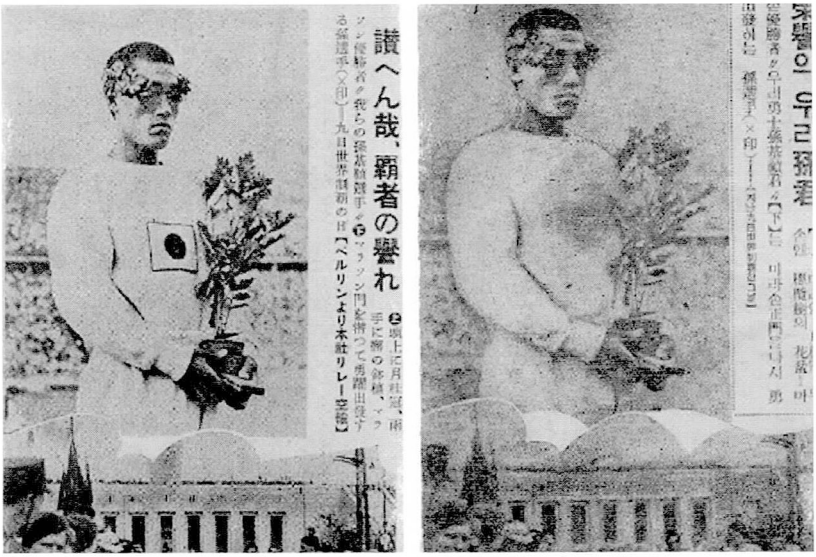
首位に立った孫はそのまま優勝し、彼の記録（二時間二九分一九秒）は当時のオリンピック記録であった。また、孫とともに「日本選手」として出場した南昇龍は二時間三一分四二秒の記録で三位であった。

2．悲しい喜び、そして授賞式

競技終了後に行われた表彰式。そこでは1位の孫基禎と3位の南昇龍が「日本選手」として表彰された。

しかし、世界のトップに立ったことを称えられる場であるにもかかわらず孫と南はそこで喜びを表現することはなかった。自分の走りによって日章旗が掲げられ、「君が代」が流されることがいかに不本意であったかは表彰式の孫の沈痛な表情によくあらわれている。これは二位のハーパー選手がユニオンジャックを誇らしげにまっすぐと見つめる表情とは対照的なものであった。

副賞でもらった月桂樹の鉢を持って表彰台に立つ孫の顔には国を失った者の悲しみがにじみ出ていた。

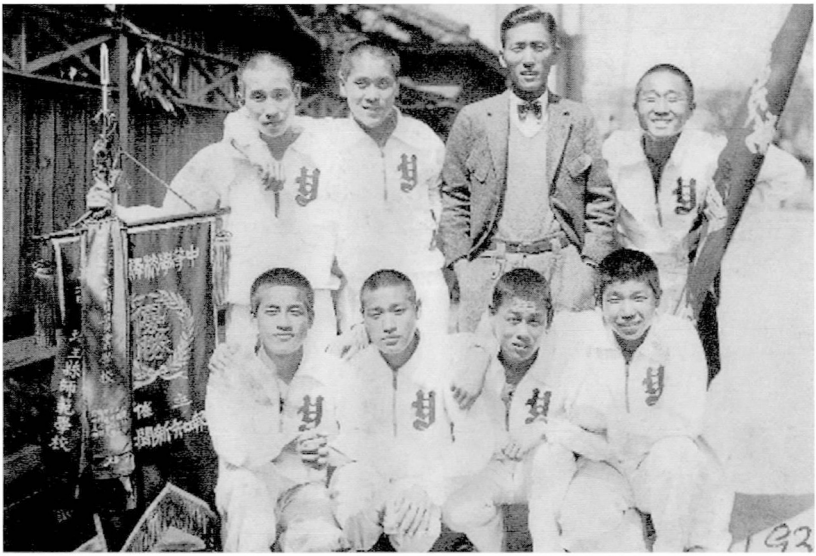


【資料５】大阪朝日新聞の記事（左）と日章旗が消された東亜日報の記事（右）
（『孫基禎が駆けてきた道』、34頁）

3．日章旗抹消事件

一九三六年八月二五日、孫基禎のオリンピックでの優勝を報じた東亜日報は、孫の胸の日章旗を消した写真を掲載した。これに関わったとされる編集者、記者は逮捕され、八月二九日をもって東亜日報は無期限の出版停止処分とされた。いわゆる「日章旗抹消事件」である。

『孫基禎が駆けてきた道』では、記事の写真とともに当時、東亜日報の体育主任記者であり、逮捕されたひとりである李吉用についても紹介されている。



【資料６】1932年頃の養正高等普通学校時代（前列左から２番目が孫基禎）
（『孫基禎が駆けてきた道』、41頁）

二．孫基禎の人生

1．孫基禎の選手生活

孫基禎は一九一二年五月二九日、平安北道新義州に生まれた。幼少期の生活は貧しく、普通学校を一六歳で卒業したのも貧困のためであった。冬に凍った鴨緑江でスケートをする他の子どもを羨ましく思ったが、スケート靴を買うことができず、お金がかからないランナーとなることを選択した。

一九三一年一〇月、一九歳の時に平安北道代表選手として参加した第七回朝鮮神宮競技大会の五〇〇〇メートルで優勝、翌一九三二年三月の京永マラソンで２位の成績を残した孫は、同年四月に陸上競技の名門である養正高等普通学校に入学する。

養正高等普通学校入学後、ベルリンオリンピックまでに孫が残した成績は次のとおりである。

一九三二年五月　ロサンゼルスオリンピック朝鮮予選　五〇〇〇メートル一位、一〇〇〇〇メートル二位
六月　全朝鮮中学校対抗陸上選手権大会　五〇〇〇メートル三位
九月　全朝鮮対抗陸上競技大会　五〇〇〇メートル一位
第一〇回全朝鮮中等学校陸上競技大会　一五〇〇メートル一位、八マイルマラソン二位
一〇月　関西体育大会　五〇〇〇メートル二位
第八回朝鮮神宮競技大会　五〇〇〇メートル二位、一〇〇〇〇メートル二位
第二回八マイル短縮マラソン　一位
一九三三年　京城―忘憂里一五マイル短縮マラソン　一位
三月　京永マラソン　一位
六月　全朝鮮中等学校陸上競技大会　八〇〇メートル三位、一五〇〇メートル一位、五〇〇〇メートル一位
七月　全朝鮮対早稲田大学陸上対抗戦　五〇〇〇メートル一位
八月　全朝鮮対抗満洲陸上軍対抗戦　五〇〇〇メートル三位
一〇月　全朝鮮中等学校陸上大会　郊外マラソン（八マイル）一位、一五〇〇メートル一位
第九回朝鮮神宮競技大会　マラソン一位（世界新記録）
一九三四年三月　京永マラソン　二位

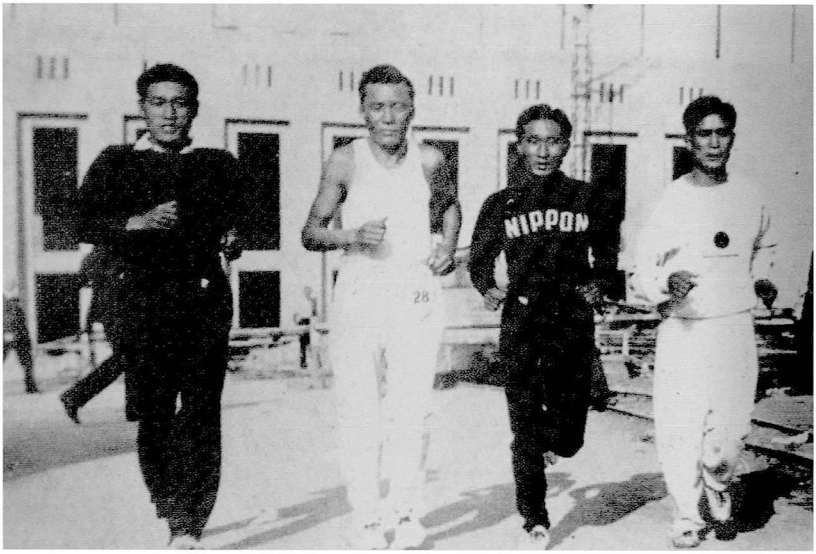
四月　京城陸上選手権大会　五〇〇〇メートル一位
フルマラソン大会　一位
六月　中等学校陸上大会　四〇〇メートル一位、八〇〇メートル一位
八月　第一回全朝鮮中等学校陸上対抗戦　八〇〇メートル一位、一五〇〇メートル一位、五〇〇〇メートル一位
一〇月　鮮満対抗陸上競技大会　一五〇〇メートル二位、五〇〇〇メートル二位
第十回朝鮮神宮体育大会　一五〇〇メートル一位、短縮マラソン一位
一一月　第十五回全朝鮮総合競技大会　一五〇〇メートル一位、マラソン一位
一九三五年二月　全朝鮮陸上競技大会　八〇〇メートル五位、一五〇〇メートル二位、五〇〇〇メートル二位
第一回マラソン大会（八マイル）　一位
三月　第六回京仁駅伝大会　養正高等普通学校優勝
第一回全日本マラソン大会　一位
四月　第一一回ベルリンオリンピック候補選抜戦　五位
第一回全朝鮮マラソン大会　一位（非公認世界新記録）
七月　全朝鮮中等学校陸上対抗戦　八〇〇メートル二位、一五〇〇メートル二位、五〇〇〇メートル一位
八月　全日本中等学校陸上大会　八〇〇メートル二位、一五〇〇メートル二位、五〇〇〇メートル二位

九月　道内中等学校陸上大会　一五〇〇メートル四位、五〇〇〇メートル一位
全朝鮮中等学校陸上競技大会　五〇〇〇メートル一位、一六〇〇メートルリレー一位
全日本陸上選手権朝鮮予選　マラソン一位
一〇月　第一一回朝鮮神宮体育大会　マラソン二位
第一六回全朝鮮総合競技大会　一〇〇〇〇メートル一位、一六〇〇メートルリレー一位
一一月　第八回明治神宮体育大会　マラソン一位
一九三六年三月　京仁駅伝競走　養正高等普通学校六位
四月　マイル短縮マラソン　四位
第一一回ベルリンオリンピック派遣選手記録会マラソン　一位（派遣確定）
五月　第一一回ベルリンオリンピック最終予選　二位（出場再確定）
七月　現地最終予選短縮マラソン　一位

2. 孫基禎の民族的愛国観

通常よりも遅れて普通学校を卒業した孫は先生の勧めで勉学と競技の両立ができるということで日本へ渡る。しかし、日本では過酷な労働生活を送り、劣等感と苦しみを抱えることとなる。日本での生活を続けることを断念した孫は日本に渡ることを勧めた先生に裏切られた思いで故郷に帰った。

自尊心の強い孫はこの時の経験によって日本への憎悪を抱くようになった。彼の最初の日本での生活がスムーズなものであったならば、その後の日本への感情や愛国心も違うものになっていただろう。



【資料７】日章旗や「NIPPON」の文字が入っていないスポーツウエアで練習する孫（左端）（『孫基禎が駆けてきた道』、46頁）

ベルリンオリンピック参加のため現地に到着した後、競技当日の八月九日までの一五日程度の選手村での様子を撮った写真にも孫が日章旗やNIPPON、JAPANという表記を嫌っていたことを窺えるものがある。［資料7］に示したように、練習でも日章旗やNIPPON、JAPANの文字が入ったスポーツウェアを着用していない孫の姿があり、自身が日本人であることを認めておらず、また望んでいなかったことを暗に示している。

また、優勝後にも名前をハングルでサインし、朝鮮の地図を描いてKOREAと英語で国籍を書いたという。

三．第十一回ベルリンオリンピック

1．ベルリンオリンピックの意義

一九一六年、オリンピックはベルリンで開催することが予定されていたが、第一次世界大戦によって中止された。一九三一年に再度オリンピックの開催都市として決定したベルリンではその後、総選挙に勝利したナチ党が力を持つことになる。

当時のドイツにとって一九三六年のオリンピックは第一次世界大戦で敗戦したドイツの復興とゲルマン民族の優位性を世界に誇示する絶好の機会であった。

スポーツを政治手段として利用したと言われるベルリンオリンピックであるが、大会の特徴として注目されるのは、ギリシャのオリンピア・ゼウス神殿からベルリンまでの聖火リレーの開催、マラソン優勝者に古代ギリシャの伝統を連想させる月桂樹の授与、世界的な芸術家が多数参加したハイレベルな文化行事であることの誇示、レニ・リーフェンシュタール監督による記録映画『オリンピア』の制作などである。

また、競技結果という点では、孫基禎のマラソンでのオリンピック新記録、ジェシー・オーエンス（アメリカ）の一〇〇メートルでの世界新記録を含む二〇〇メートル、四〇〇メートルリレー、跳躍での優勝による四冠達成、マージョリー・ゲストリング（アメリカ）による飛込競技での最年少金メダル獲得（一三歳）、ジョン・ラブロック（ニュージーランド）の一五〇〇メートルでのオリンピック新記録樹立などが注目される。

附録

本書の後半には附録として孫基禎やオリンピック関係の写真および関連資料が掲載されている。その一覧は次のとおりである。（キャプション付きのもののみ）

・「一九三七年四月宝城専門学校の頃」（人物写真）
・「解放後の国体でオープン戦に参加する孫基禎」（人物写真）
・「一九三五年六月養正高等普通学校の学友たちとともに」（人物写真）
・「オリンピック優勝後、家族と近所の住民たちと撮った記念写真」（人物写真）
・「宝城専門学校時代（一九三七年）」（人物写真）
・「養正高等普通学校時代の学生証」（史料写真）
・「孫基禎の明るい笑顔」（人物写真）
・「孫基禎とハーパーの競争（一四キロ地点）」（人物写真）
・「スタート後二キロ地点」（人物写真）
・「スタジアムを出た後」（人物写真）
・「一七キロ地点」（人物写真）
・「明治神宮大会で世界新記録を樹立した孫基禎」（写真資料）
・「授賞式の場面」（人物写真）
・「優勝直後、勝利感ではなく虚脱して更衣室へ向かう孫基禎」（人物写真）

『孫基禎が駆けてきた道』について（山下）

・「一九四八年四月、徐潤福選手がボストンマラソン大会で優勝（孫基禎監督・南昇龍コーチ）した後に撮影した記念写真（金九先生、李承晩とともに）」（人物写真）
・「ドイツ人女性から月桂樹を受けたハーパー」（人物写真）
・「孫基禎が金九先生から激励を受ける様子。一九四六年八月九日、徳寿宮で開催されたマラソン制覇一〇周年行事で一九三六年ベルリンオリンピックの授賞式の場面を再現」（人物写真）
・「那智の宣伝として利用された一九三六年第一一回ベルリンオリンピックの開会式の場面」（人物写真）
・「五六ヵ国五〇〇〇名の選手団がメインスタジアムで選手宣誓をしている」（人物写真）
・「選手、役員二四七名が派遣された日本代表チームの入場」（人物写真）
・「日本選手団の選手村入村式」（人物写真）
・「勝ちに来た！国境を越えて満洲、シベリア大陸を横断した後、東ヨーロッパを経てベルリンに到着した日本マラソンチーム」（人物写真）
・「勝って来た！日本の神戸港に着いた陸上競技のメダリストたち」（人物写真）
・「四冠王アメリカのジェシー・オーエンス」（人物写真）
・「日本水泳の看板スターである前畑」（人物写真）
・「十種競技の勝者アメリカのグレン・モリス」（人物写真）
・「四〇〇メートルの勝者アメリカのアーチー・ウィリアムズ」（人物写真）
・「ジェシー・オーエンスの勝利」（人物写真）
・「好成績を残した選手のための歓迎会」（人物写真）

・「三段跳の優勝者田島直人とともに選手村で」（人物写真）
・「カンヒョング画伯が描いた若き日の自身の姿の前で涙を流す孫基禎」（人物写真）
・「レニ・リーフェンシュタール女史。彼女は二〇年後の一九五六年に孫基禎に再会した」（人物写真）
・「優勝直後、本国のインタビューに応じる孫基禎と南昇龍」（人物写真）
・「一九四八年韓国は初めて太極旗を携えて第一四回ロンドンオリンピックに参加した（選手団旗手は孫基禎）」（人物写真）
・「孫基禎は素晴らしい指導者だった。一九四八年徐潤福選手のボストンマラソン優勝の他、一九五〇年のボストンマラソン大会でも咸基鎔、ソンキルユン、チェユンチルが一、二、三位を獲得する成果を挙げた」（人物写真）
・「オリンピックマラソン優勝賞状」（史料写真）
・「IOC 委員長 Brundage が送った書簡」（史料写真）
・「レニ・リーフェンシュタール女史からの書簡」（史料写真）
・「『悲しい』と書いた孫基禎のはがき」（史料写真）
・「孫基禎の直筆署名」（史料写真）
・「ギリシャ政府がマラソン優勝者に贈る兜。五〇年ぶりにドイツの博物館から孫基禎に返還された」（展示品写真）
・「オリンピックの金メダル」（展示品写真）

付記　本研究はＪＳＰＳ科研費ＪＰ１９Ｈ０１４０６の助成を受けたものです。

『孫基禎が駆けてきた道』について（山下）